

日本色彩学会誌

JOURNAL OF THE COLOR SCIENCE ASSOCIATION OF JAPAN

VOLUME 27 NUMBER 1 2003



巻頭言

日本色彩学会のAICへの貢献

日本色彩学会理事, AIC理事 矢口 博久

昨年から日本色彩学会理事に復帰し、国際担当を仰せつかった。その前の2001年のロッチェスターAIC大会の時には、AIC理事に就任した。池田前会長に引き続き、日本からAICの執行部へ入ったことになるが、これはAICが日本色彩学会に期待するところが大きいと考えると、その重責を感じざるを得ない。

1997年にAIC京都大会を開催したことは、日本色彩学会に新たな前進をもたらしたと感じている。この京都大会の前後から、これまで日本色彩学会とはあまり縁のなかった人たちが、特にデザインや画像技術関連の人たちが日本色彩学会の活動を知り、入会のきっかけになったのではないと思う。また、京都大会に参加し、色に関する様々な国際的な動向を知り、また色々な外国の人を知ることになり、このようなことがきっかけで、国外へ出てみようという人も増えたのではないと思う。京都大会以後も毎年AICのコンファレンスは開催されているが、オスロ、ワルシャワ、ソウル、ロッチェスター、そして昨年のスロベニアでは、日本は開催国に次いで2番目の参加人数を数えるようになった。

そして、今年はタイのバンコック中間大会が開催される。これにも大勢の日本からの参加が期待されている。1999年に当時の池田AIC会長から、タイで色彩学会を設立する動きがあり、その旗揚げの国際コンファレンスが開催されるので、日本色彩学会も何らかの

形で後押しができないかと相談があった。当時スタートしたばかりの国際交流委員会としても絶好の国際貢献の機会と判断し、日本色彩学会から何人かの講演者を派遣することを理事会に諮り、承認された。幸い、スガウエザイングの海外出張助成という経済的支援のお陰もあり、AIC京都大会の時のプログラム委員会のメンバーであった山岸政雄先生、齋藤美穂先生、富永昌治先生と私の4人が参加し、タイ・カラーグループ設立のお手伝いできた。そのタイ・カラーグループがAIC中間大会を開催するまでに発展したことは日本色彩学会としても実に喜ばしいことである。

さて、AICには色彩学の最高の栄誉であるJudd賞がある。大会と中間大会と、2年毎に授与される。これまで日本人では、印東太郎先生、納谷嘉信先生が受賞されている。今回のタイ中間大会でも授賞式があるが、誰がこの栄誉に与えるのだろうか、大いに楽しみである。ひょっとしたら、また日本から…。

さあ、日本から大勢でタイに押しかけて、アジアのそして世界の色彩活動を盛り上げていこう。「オリンピックは参加することに意味がある」と言われたが、AICに参加することも日本色彩学会にとって大切な国際貢献であると思う。

(千葉大学工学部情報画像工学科教授)